

マンガと役割語研究

金水 敏

はじめに

私は日本語文法の歴史的研究を進める一方で、2000 年以来、「役割語」(role language) の研究を始めましたが、この役割語研究も 11 年を経て次第に日本内外に認知されるようになり、毎年のように、留学生が役割語について学ぶために大阪大学を訪れるようになりました。本稿では、日本における役割語の発展にマンガが大きな貢献をしていることを述べ、役割語研究とマンガ研究が切っても切り離せない関係にあることを主張したいと思います。

役割語とは何か

役割語とは、主にフィクションのなかで、セリフを話す人物の人物像（性別、年齢・世代、職業・階層、地域・国籍・人種等）を強く連想させる話し方のパターン（語彙、語法、音声的特徴、セット・フレーズ等の組み合わせ）のことを言います。例えば、次の例をご覧ください。内容はすべて “Yes, I know that.” に相当します。

- (1)a. そうじゃ、わしが知っておるんじゃ。
- b. そうよ、あたしが知ってるわ。
- c. そうだ、おれが知ってるぜ。 (Kinsui 2010:51 より)

日本で育った日本語話者であれば、概ね (1a) は老人、(1b) は女性、(1c) はマッチョな男性が話していると検討を付けることができます。

役割語は、リアルな日常言語と大きな開きがあることがありますが、それにも関わらず、その知識は日本語使用者の間で共有されているとみることができます。その要因は、多くの日本語話者が子供の頃から接しているポピュラーカルチャー作品を通じて役割語が形成され、媒介され、拡散されているからです。そのポピュラーカルチャー作品の中でも、とりわけマンガ（そしてアニメ）の果たす役割は大きいでしょう。具体的に、金水 (2003) で述べられている、〈老人語〉の成立過程を例に挙げて説明しましょう。

ケーススタディ：〈老人語〉

〈老人語〉の特徴は、標準語の「だ」の位置に「じゃ」が現れ、否定の「ない」の位置に「ん」が現れることなどです。これらの特徴は、現代方言では西日本方言の特徴に合致します。これ

は次のような理由によります。

前近代の江戸時代、幕府が東日本の江戸（現代の東京）に開かれましたが、武士を初めとして、権力者、資本家、知識人は概ね西日本系のことばを話していました。これは、その時代までの日本の政治・経済・文化の中心地がずっと西日本にあったためです。ところが江戸時代の中頃（18世紀後半）以降、江戸の市民が経済的な力を得るとともに、自分たちのことばを話そうとする機運が高まりました。若者は率先して東日本系のことばである江戸ことばを話し始めましたが、地位や権力や知識のある老人は西日本風のことばを話す傾向がありました。この傾向が演劇や小説などで誇張的に表現されたのが、老人語の始まりです。

江戸時代の老人語には、まだ実態の反映という面がありましたが、近代に入って小説や子供の読み物などに受け継がれていくなかで、実態とは離れ、完全に想像的な表現となっていきました。特に、戦後の日本に老人語を定着させた貢献者が手塚治虫であることは間違いないでしょう。「鉄腕アトム」のお茶の水博士を初めとして、彼の作品には多くの「博士」が登場しますが、彼等はたいてい老人語を話すのです。手塚治虫は大変影響力の強い作家だったので、彼に続く作家たちも、老人語を話す老博士を自分の作品に登場させました。例えば石ノ森章太郎のギルモア博士（「サイボーグ 009」）、青山剛昌の阿笠博士（Dr. Agasa、「名探偵コナン」）などがそれです。これらの作品のおかげで、今でも大人から子どもたちにいたるまで、日本語話者は老人語を認識することができるのです。



図1：お茶の水博士（手塚治虫『鉄腕アトム』1、手塚治虫漫画全集 221: 92 頁、講談社、1979）



図2：ギルモア博士（石ノ森章太郎『サイボーグ 009』4: 80 頁、MF コミックス、メディアファクトリー、2001）



図3：阿笠博士（青山剛昌『名探偵コナン』1: 123 頁、小学館、1994）

日本における役割語とマンガの関係

〈老人語〉の例に見るように、特定の役割語が一般化することにたいして、マンガが果たす役割はまことに大きなものがあります。特に有力な作家が使用した場合は、その影響力は大変大きいと言えましょう。またマンガ表現にとっても、役割語は重要な表現手段と言えます。役割語は、回りくどい説明なしに、話し手の属性を端的に提示することができます。絵柄にふさわしい役割語を使うことで、場面に説得力を与えることができますし、また役割語をわざとズラして使用させることで、読者にそのキャラクターを強く印象づけることもできるでしょう。

例えば「るろうに剣心－明治剣客浪漫譚－」（和月伸宏）では、武士の身分がなくなって、武士階級の独特のヘアスタイル（ちょんまげ）を落とした主人公・緋村剣心に「ござる」という〈武士ことば〉の表現を使わせることで、主人公が未だ武士の心を失っていないことを示しています。また「DRAGON BALL」（鳥山明）では、青年将校という出で立ちのブルー将軍に〈女ことば〉を使わせることで、この人物が性非同一者であるかもしれないことを暗示しています。



図 4: 緋村剣心（和月伸宏『るろうに剣心－明治剣客浪漫譚－完全版』1: 60 頁、集英社、2006）



図 5: ブルー将軍（鳥山明『ドラゴンボール完全版』5: 179 頁、集英社、2003）

表 2: 本調査で使した人物像と言葉づかい

人物像 (イラスト)	言葉づかい	
	日本語版	韓国語版
A. 活発な少年  ◎黒斗・目下青鬼(モンスター, p.37) / MATO-KUSAKA Hidenori (김태성 訳) (문스타, p.37)	- ついてくんない!! (p.45) - 待ってたぜ (p.39)	- 따라오지마 (p.45) - 기다렸다 (p.39)
B. 上品なお嬢様  ◎神尾素子(花, p.104) / Yoko Kamio (조영희 訳) (문스타, p.104)	- 幼なじみですよ (p.107) - いらしてたの? (p.159)	- 어렸을 때부터 친한 사이예요. (p.107) - 와 있었구나. (p.159)
C. 年寄りの博士  ◎青山剛昌(コナン 2, p.95) / AOYAMA Goshou (이희정 訳) (코난, p.95)	- 昔からそうじゃー… (p.95) - 辛い事もあるじゃろうが、もう少しの辛抱じゃ! (p.8)	- 옛날부터 그랬어. (p.95) - 조금만 참겨라. 힘들겠지만. (p.8)
D. インテリ医者  ◎佐藤秀峰(ブラック, p.95) / Syuho Sato (박만 訳) (헬로우, p.95)	- どうしますかな? (p.98) - もう一度よく考え下さい (p.99)	- 어떻게 할까요? (p.98) - 다시 한번 잘 생각해 보시죠. (p.99)
E. ネズミ人間  ◎黒斗・目下青鬼(モンスター, p.120) / MATO-KUSAKA Hidenori (김태성 訳) (문스타, p.120)	- なんや、おるやないけ。 (p.121) - ムチャしたらアカン! (p.123)	- 왜 거기 있잖아. (p.121) - 그건 안돼. 나까지 위협하잖게. (p.123)

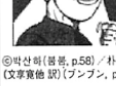
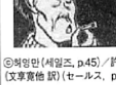
韓国語原作	F. 昔のお嬢様  ◎김혜민(비천무, p.21) / 김혜민(文享實 訳) (원천, p.15)	- 失礼します (p.131) ○○にいわれる筋合いはありません (p.107)	- 실례하옵시다. (p.137) ○○가 상관하실 일은 아니지요. (p.113)
	G. 昔のお爺さん  ◎김혜민(비천무, p.109) / 김혜민(文享實 訳) (원천, p.103)	- こっちにくれ (p.38) - そうかい… (p.103)	- 이리 좀 다오. (p.44) - 오냐… (p.109)
	H. 優しいおばさん  ◎전승원(원인 1, p.77) / 전승원(文享實 訳) (원인, p.63)	- おかえり (p.105) - やっぱりわたしがやるわ (p.10)	- 어서 오너라. (p.119) - 아니다. 내가 하마. (p.24)
	I. 男子高校生  ◎박산희(불꽃, p.58) / 박산희(文享實 訳) (불꽃, p.58)	- だからどーするってんだよ (p.90) - ちょっとおかしいんだよ… (p.24)	- 그래서 어찌자는 거냐? (p.90) - 그…근데, 그게… 좀 이해가… 안 되잖아. (p.24)
	J. 怠け者のおじさん  ◎채영민(세일즈, p.45) / 채영민(文享實 訳) (세일즈, p.47)	- 結局同じものか (p.47) - 明日まで決めて連絡するから (p.47)	- 결국 같은 종류구먼. (p.45) - 내일 결정해서 알려주세요 (p.45)

図 6: 鄭 (2007) で用いられた人物像と言葉遣い (鄭 2007: 81-82)

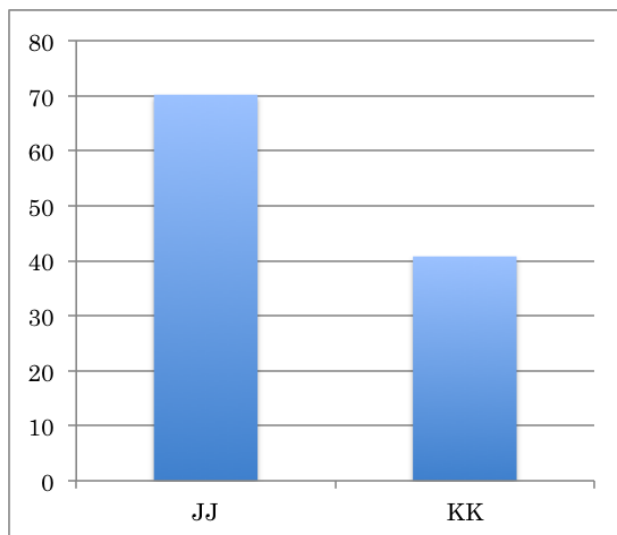


図 7: 日本人かつ日本語話者 (JJ) と韓国人かつ韓国語話者 (KK) の正答率 (鄭 2007 で示された数値を元に金水が作成)

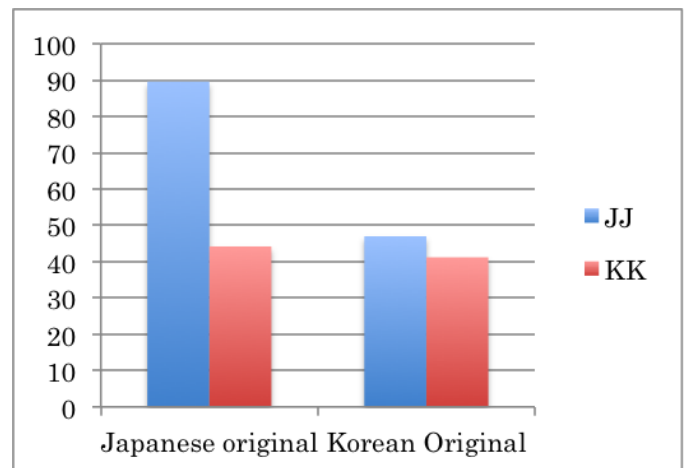


図 8: 原作が日本のものと原作が韓国のもの、それぞれにおける日本人・日本語話者 (JJ) と韓国人・韓国語話者 (KK) の正答率 (鄭 2007 で示された数値を元に金水が作成)

このような点から、『〈役割語〉小辞典』（金水編 2014）では、使用した日本語テキスト 273 種のうち、およそ 3 分の 1 にあたる 93 種をマンガが占めています。これは、役割語のイメージを伝えるのにマンガの用例がとても適しているからです。マンガからの画像の転載も 39 箇所ありますが、これも大変効果を上げています。

マンガと役割語のマッチングの強さ・細やかさの国際比較について、鄭 (2007) が興味深い実験を行っています。彼女は日本人と韓国人を対象にマンガの画像と台詞とを分離し、改めて被験者にマッチさせる実験を行いました。マンガは日本語の原作およびその韓国語訳と、韓国語の原作およびその日本語訳を使用しました。日本人の日本語話者は、この実験で正答率が 70.2% でしたが、韓国人の韓国語話者は 42.8% でした。さらに日本語原作に限定すると日本語話者の正答率は 89.6% にもなりましたが、韓国語話者は、日本語原作で 44.2%、韓国語原作で 41.2% とあまり開きがありませんでした。この結果は、日韓を比較した場合、日本語作品の方が役割語とキャラクターのマッチングが細やかであり、かつ読者における知識の共有度も日本語話者の方が高いことをよく表しています。

マンガが果たす負の役割

役割語は言語的なステレオタイプであるので、時に、特定の社会的グループに対する偏見や差別を助長するという負の役割を負うことがあります。その場合も、マンガが果たす役割は時として大変重いものがあります。金水 (2014) に基づき、中国人を表象する〈アルヨことば〉を例にとって説明します。

19 世紀後半、日本が開国され、西洋諸国の外国人とともに、多数の中国人が日本にやってきました。中国人は日本人と西洋人の間に立って通商の仲立ちをしたり、行商や大道芸人として



図 9: 豚勝将軍と豚軍の兵士（田河水泡『のらくろ総攻撃』45 頁、講談社による複製本、1969。原作は大日本雄弁会講談社、1937）

日本人社会に入り込んでいきました。彼等は日本人とのコミュニケーションにおいて一種のピジン (pidgin) を使用することがありましたが、資料の上ではその実態は一樣ではなく、いくつもの変種があったようです。ところが今日までに、ポピュラーカルチャーの世界で中国人の話すピジンといえば、「ある (aru)」「よろしい (yoroshii)」が文末に用いられる変種＝アルヨことばにほぼ限定されるようになりました。早い例としては宮沢賢治の1921年の作品が挙げられますが、アルヨことばが一般的になる推進力となったのは、1937年・38年の田河水泡による「のらくろ」シリーズでしょう。1937年はちょうど、日中戦争が開始された年ですが、作品の中では日本軍になぞらえられた猛犬軍と中国軍になぞらえられた豚軍の戦争が描かれており、猛犬軍が規律正しく勇猛な軍隊であるのに対し、豚軍は、残虐で無能な将軍に率いられた、結束力の弱い軍隊として描かれています。そうして、豚軍は徹頭徹尾、アルヨことばを喋らされています。つまり、豚軍が負けて当然の劣った集団であることと、彼等がピジンであるアルヨことばを話すこととの間に、必然的な結びつきがあると読者に思わせるように、作品が作られているのです。これでは悪意を持った役割語の濫用であると言われても弁解ができないでしょう。「のらくろ」シリーズは大変影響力が強かったので、手塚治虫をはじめとする戦後の作家にも、アルヨことばの使用が伝えられますが、その場合に、アルヨことばの話し手は何かしら、ネガティブな側面をもっていたり、滑稽な人物であったりするなど、バイアスがかかった表現になっているのです。

最後に

このように、役割語の研究にとってマンガが欠くべからざる資料であることが明らかになりましたが、逆に言えば、マンガが日本語全般に及ぼす影響力の絶大なることも、改めて確認できたと思います。これからも役割語研究とマンガ研究は手を携えて進めていくべきであると結論づけたいと思います。

参考文献

金水 敏 (2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店。

金水 敏 (2010)「現代日本語の「役割語」―ステレオタイプ的話体の研究法の模索―」『役割・キャラクター・言語―シンポジウム・研究発表会報告―』pp. 48-50, 科学研究費 基盤研究 (B) 研究、課題番号：16320060、研究代表者：金水 敏。

金水 敏 (2014)『コレモ日本語アルカ？ 異人のことばが生まれるとき』岩波書店。

金水 敏 (編) (2014)『〈役割語〉小辞典』研究社。

鄭 恵先 (2007)「日韓役割語対照研究：その可能性を探る」金水 敏 (編)『役割語研究の地平』pp. 71-93, くろしお出版。

Teshigawara, Mihoko and Kinsui, Satoshi (2011) “Modern Japanese ‘Role Language’ (*Yakuwarigo*): fictionalised orality in Japanese literature and popular culture,” *Sociolinguistic Studies*, 5-1: 37-58, Sheffield: Equinox Publishing.